

電源にこだわる国産ブランド

ALLIONユーザー探訪記

第8回

出水電器のアンプブランド「ALLION」のアンプを愛用するユーザーを訪ねる

理想のオーディオを実現するDEQXの 厳しい性能要求をS-200が支える！

取材／執筆
田中伊佐資
Isashi Tanaka



長野県北佐久郡軽井沢町
Kurizz-Labo (クリズラボ) 代表
栗原 信義さん

試聴室のシステム概要は、CDトランスポートが Accuphase DP-90、プリアンプ／ch デバイダー／ SP&Room 補正／ DA が DEQX HDP-3、パワーアンプが低音：ALLION S-200、中音：ALLION S-200、高音：自作 A クラス 30W、スピーカーシステムは、低音：TAD TL-1601a + 250 リットル完全密閉箱、中音：TAD TD-4001 + TH-4001 ウッドホーン、高音：Fostex T-500 ホーントゥイーター。DEQX を使った 3Way マルチアンプで駆動中

徹底した音へのこだわりはもちろん、1000/2000V 対応や出川式回路など、他の追随を許さない電源への情熱を込めた究極の国産アンプ、ALLION。増幅機として妥協を排した作り込みと、大メーカーにはない先鋭的な構成。折り紙つきとも言える駆動力と再現性は、噂を聞きいち早く導入した先端オーディオマニア達からも絶賛を受ける。今回はミキシングエンジニア 30 年、趣味のオーディオ歴 40 年の音のプロ、栗原さんが取り扱う夢のマシン、DEQX とのコラボによるアンプ誕生ストーリーをお届けする。

●革新の DEQX と先鋭的なアリオン
天才的な高機能マシン DEQX は
マルチ構成の理想を叶える夢の機器

「すっかり暑くなりました。いよいよ軽井沢ですね」と、出水電器の島元澄夫社長からお呼びがかかった。軽井沢には Kurizz-Labo (クリズラボ) がある。クリズラボはもともと早く、この連載で訪問すべき要所だった。しかし、うだるような東京を脱出して、避暑地に行く気分こそが尊いという、身勝手なほどの主張がなんとなくまかり通ってしまい、ここまで引っぱってしまっただけ。

クリズラボは、DEQX (デックス) という会社の HDP-3 というモデルを輸入販売してい

る。HDP-3 は一口では説明しきれないのだが、思い切り端折って言う、プリアンプ、3ウェイのチャンネルバイダー、DAC、イコライザー、ルームアコースティック補正などの機能が、オールインワンとなった型破りなマシンである。その天才的高機能ぶりを書き出すと、あつという間に誌面が埋まってしまうので横に置いておくとして、それを扱う栗原さんと ALLION の関係がこのたびのテーマになる。

●2社のコラボからパワーアンプ誕生へ
筆者宅でアリオンを聴いたのを発端に
高度な要求に応える製開発が始動！

ラボを立ち上げる前の栗原さんは、NHK でミキシング一筋のエンジニアだった。ミキサーといっても分担があるらしく、主に「報道」と「ホール」を担当していた。ホールといえば NHK ホールだ。N 響や歌謡番組などの収録を行っていた。そして NHK ホールといえば、そのシンボルが紅白歌合戦となる。ミキシングのメインチームで 4〜5 回、大小合わせれば 15 回ぐらいは関わったという。チーフを任された年もあった。

また、70 年代後半から始まる NHK デジタル化推進の先頭にも立った。現在も使われているフエアライト社製デジタル・オーディオ・ワー

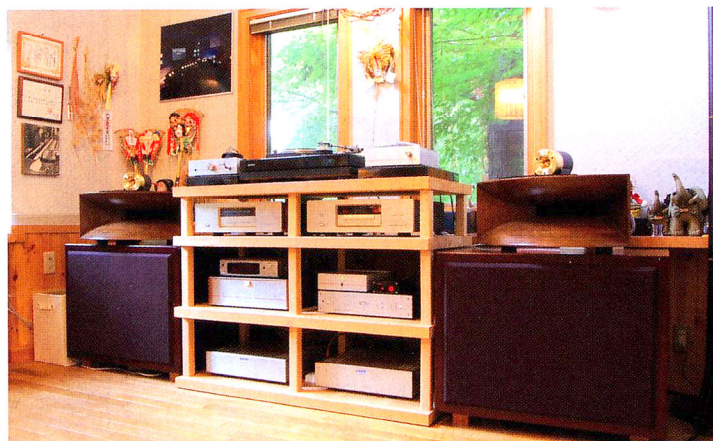
クステーションの採用は、NHK 史に残る出来事だった。

やがて栗原さんは NHK を退職するわけだが、まったく偶然にも同じタイミングで、そのフエアライト社の社長が、DEQX 社を立ち上げる。プロマーケットで築いた画期的なデジタル技術を携えて、ピュアオーディオ界に乗り込んだ。実は栗原さん、少年時代から大のオーディオマニアで、DEQX の機能を知り「こんな夢のマシンはない」と確信して、クリズラボを設立、販売を開始したのである。

という流れから、多くの話になる。マルチアンプをやるうと思つて、パワーアンプは ALLION の S-100 と M-300、そしてそれを束ねるチャンネルバイダーとして、DEQX を数年前に買った。

ところが DEQX は、ケーブルを繋げてボンと音が出るものではない。個々のスピーカーユニットの特性や部屋の状況などを、マイクで信号を拾いながらパソコンで分析させる。その結果、システムを最良の状態に導いてくれるのだが、マニュアルと首引きで設定することは多岐に渡る。ぼくは栗原さんに出張サービスしてもらい、教えてもらつた現実的にはやつともらつたことにした。

栗原さんは、うちでまったく見知らぬ ALL



ION というアンプの音を聴くことになった。これは悪くないと思つたのか、どこの誰がどのように作っているのか興味を持ったようだ。というのも、かつて『電波科学』という雑誌